

石薬師寺の絵馬 [昔話シリーズ]

この絵馬はお堂を取り囲む囲いの内側に掲げられている。縦横1メートルを超える大きさの立派なものである。

絵馬はこれ

江戸時代の作ということで、輪郭だけが残っている。色は不明だが塗料の跡はあったようだ。

絵馬の下にこの絵馬の昔話が書かれた板がある。薄くはなっているが文章はまだ読める状態である。最後に伊藤俊一氏の名前がかろうじて読み取れる。俊一氏が納めたものだそうだ。

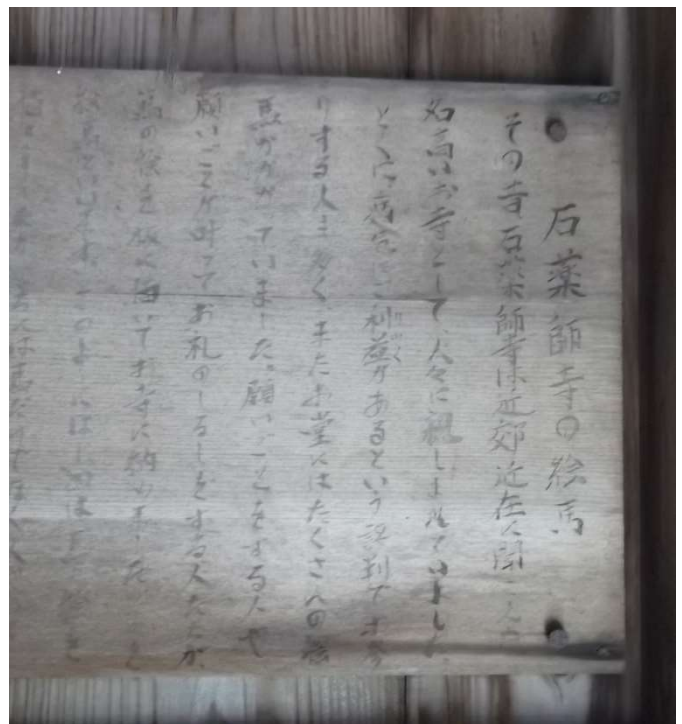


絵馬の掲げられてある場所
お堂の回廊の内側南東部にある。

絵馬の昔話は以下のようなものである

その昔、石薬師寺は近郊近在に聞こえた名高いお寺として、人々に親しまれていました。

とくに、病気にご利益があるという評判でお参りする人も多く、またお堂にはたくさんのお絵馬がかかっていました。願い



昔話の書かれた板 初めの部分が読み取れる

ごとをする人たちや、願いごとが叶ってお礼のしるしをする人たちが、馬の絵を板に描いてお寺に納めました。それを絵馬といいます。そのようにはじめは馬の絵を描きましたが、のちには馬だけでなく人や、いろいろな鳥・けだものをかくようになりました。こうして、その絵が馬でなくても、それらを絵馬というようになりました。



さて、ある人が大病をなおしてもらった石薬師寺の靈験に感謝して、立派な大きい絵馬を奉納しました。その絵に描かれている馬は、あたかも生きていよう、いまにも絵の中からとび出してきそうな、それはそれは上手な出来栄でした。絵馬はお堂の正面にかかげられました。お坊さんも参詣に訪れる人たちもその絵馬を見るたびに感心するばかりでした。あまりにも上手に描かれて生きていようだからです。

その絵馬が奉納されてからは、季節の野菜などのお供えをする人がめっきり少なくなりました。絵馬を納める人はたくさんいても……



村の畑の野菜もその年は、大変な不作でした。いつも、お寺にお供えする野菜さえ満足にできませんでした。人びとは、一体どうしたことかと思案しましたが、心あたりがつかめません。

ある月明りの夜のことで。寺の小僧さんは、夜中にふと目を覚まし、境内で騒々しい物音がするのに気付きました。小僧さんは、雨戸の間からソォーとのぞいて見ました。



何か大きなものがあばれているではありませんか。自分一人では心細いので、いっしょに寝ているもう一人の小僧さんを起こして忍び足で外へ出てみました。あばれているのは大きな二頭の馬でした。小僧さんたちは、とっさに絵馬を見ました。「アッ!ない。」絵馬から抜け出してきたのです。

びっくりしたものの、二人は木々の間から様子をうかがっていました。馬は、裏参道の石段を登り門の外へ出て行きました。二人もおそろおそろあとをつけて行きました。門の外へ出た二人は再び驚きました。近くの畑で野菜を食べたり、田んぼの稲を食べているではありませんか。

これは大変なことだと、二人は早速和尚さんに伝えに行きました。夜中に起こされた和尚さんは、半信半疑でしたが抜けがらになっている絵馬を見て腰をぬかさばかりに驚きました。

やがて、三人は大声で馬を追い込みました。見つかった馬は一目散で境内に逃げ帰り、絵馬の中へきちんとおさまりました。

いくら出来栄が良くても人びとを困らすような絵馬ではこのままにしておくわけにはいきません。かといって捨てるわけにもいきません。和尚さんはいろいろ考えましたが、名案が浮かびません。やがてこの話が村中に知れ渡ってしまいました。和尚さんは大層困り、お供えものも全くなくなりました。

ちょうど、この時、建築家、彫刻家として名高い左甚五郎が通りかかり、この話を耳にしてお寺を訪れました。左甚五郎は絵馬を見て、絵馬に一本の杭をかき、前足をその杭にくくりつけました。

それからは馬もぬけ出さなくなり、田の稲もよくみのり、畑の野菜もよくできるようになりました。収穫を喜ぶ人々からも、次第にお寺へお供えをするようになりました。

以上 伊藤俊一著「鈴鹿の昔話」より



躍動感あふれる馬の絵が描かれている。物語では馬は二頭となっているが、どう見ても一頭である。左甚五郎が描いたという杭はどれだろうか？前足を杭にくくりつけたということであるが、目を凝らして見ても杭らしきものはわからなかった。わかる人にはわかるのだろう。